

旧南部における経済的独立の試みと挫折

——南部商業会議

Efforts for the Economic Independence of the Old
South and Its Failure

——Southern Commercial Conventions

山 口 房 司

(一) はじめに

1852年大統領選挙に当り、1850年大妥協を許容することを拒否した北部ホイッグは、同時に北部デモクラットよりも活発な反奴隷制派であることを示した。そして逃亡奴隷法を嫌悪した彼らは、フィルモア大統領の指名を阻止することによって復讐の一端を果した。逆に南部ホイッグは彼の指名を強く支持していた。長いデッド・ロックの後、彼らはW・スコット将軍を指名した。一方、民主党は地域間敵意の永久的解決策として「1850年妥協の究極性」を宣言し、ニューハンプンシャ州知事ピアスを大統領候補に指名した。

この選挙は、表層的に見る限りピアスの地すべりの勝利で終わった。南北双方で2州ずつ計4州を失ったのみで、ピアスは残余の全州を手中にしたのである。しかし得票を精査すれば、その勝利は見かけほどに圧勝ではなかった。自由州におけるホイッグ党と自由土地党の結合票は、諸州においてピアスの得票と僅差であることを示していたからである。しかし彼の勝利は大妥協の全国的是認を意味するものとうけとられた。民主党員が楽観的に奴隷制問題は「除去された」と考え、彼らは今や奴隷制問題の呪縛から離れて別のビジネスに突入することができた。このことは特に南部デモクラットにとって、より多く当てはまる。

それは外に向って、ガズデン購入、ピアスのキューバ対策、オステンド・マ

ニフェストなど一連の動きに明示されるごとく、1840年代よりの継起的な拡大追求の運動であった。内に向っては、南部の政治力、経済力の強化がはかられた。その典型的な諸努力の一つが、以下に述べんとする南部商業会議である。

勿論、この会議はこの期に始まったものでもなく、またその性格や目指したゴールも一様ではない。しかし大妥協後の所謂「小春日和」期のそれは、独立南部を指向したのではなく、ユニオン内にあっての南部強化策としてのそれであって当時の全国的な空気や潮流に対し、不協和音を奏するものでは決してなかった。逆にユニオンの各セクション、特に同じ農業地域である西部との協調を追求することを基盤に南部の発展をはかろうとするものであった。

しかし同時にこの運動は、極めてセクショナルな性格を帯びる素地をも併有していた。性格において健全ではあるが、それは合衆国史上、極めて早い時期の“regional planner”の集合であり計画であったからである。^①

「小春日和」がやわらいだ日射しをしばらくの間、投げかけはしたが、19世紀第1世代から所謂、再建期「^{ソリッド・サウス}堅固な南部」が出現するまでの間、アメリカ史の中心課題はセクショナルリズムであったとの基調は動くまい。

北部は西部をその陣営内にひきこもうとするセクショナルリズムであり、同じく南部もそのことの緊要性を認識し且つ現実にそのような努力を重ねたにもかかわらず、ついには特みうるのは自らのみであるとする孤独なセクショナルリズムへの道を辿った。

外には北部の繁栄と南部の相対的凋落とをかみしめながら、内には広大なるがゆえに必ずしも利害の一致しない地域を南部は抱えていた。北部のリンカーンがフロントの統一に苦慮したことは一般に知られているが、その作業の困難であったのは独り北部にとどまらない。利害の一致しない南部内諸地域の統一の問題、比較的静的であったとはいふものの、とにもかくにも進行しつつあった階級分化、加えて南部独特の困難性があった。

また州権論をもって外(北部)に対抗する以上、内からそれを振りかざして南部統一の根底を揺さぶられても防禦の手段に窮する他はなかった。州権の過度の主張は州をこえるという意味で、ナショナルリズムはおろかセクショナルリズムの形成さえ困難にしてしまうであろう。^②この両刃の剣をうまく制御し、南部内

での異なった利害を調和させての南部セクショナルリズムの形成は如何にして可能であったか。

ここにとりあげる南部商業会議は大妥協期を中心に、最も性格が健全であり極盛でもある局面を経験するが、やがては不名誉な結末を迎えることになる。この運動はその名の示すごとく、商業的活動の隆盛を意図しながら、ついには経済的過程から政治的次元への上昇、或いは一つの精神的運動が政治活動に変化することへのプロセス乃至はメカニズムを例示した点において、興味ある運動として深い意義を見出すことができる。またそれに対する考察は、内戦到来の理解の一助になるであろう。

南部商業会議の起源は、単一の或いは孤立した事件や条件から発したと説明することはできない。またその規模や内容も同一ではない。しかし16回におよぶ同会議は、その討議事項、性格よりして次のように四区分されるであろう。

対欧直接交易大会

開催期日	参加州	参加人員	開催地
1837年10月16日～18日	2	78	オーガスタ
1838年4月2日～4日	7	200	オーガスタ
1838年10月15日～17日	6	140	オーガスタ
1839年4月15日～18日	7	220	チャールストン

内陸開発大会

1845年11月12日～14日	16	574	メムフィス
1849年10月23日～26日	11	500	メムフィス
1852年1月5日～9日	11	600～800	ニューオリンズ

大陸横断鉄道大会

1852年12月18日～21日	11	500	ボルチモア
1853年6月6日～9日	14	500	メムフィス
1854年4月10日～15日	13	857	チャールストン

鉄道および奴隷交易再開大会

1855年1月9日～14日	11	200	ニューオリンズ
1856年1月30日～2月3日	7	500	リッチモンド
1856年12月8日～12日	10	564	サヴァンナ
1857年8月10日～13日	11	500	ノックスヴィル
1858年5月10日～14日	11	710	モントゴメリー
1859年5月9日～13日	11	500	ヴィクスバーグ

これらのうち大妥協後の小春日和期に当たる1852年ニューオリンズ大会がおよそ800名、1854年チャールストン大会が857名の大代表団を迎えて開かれたことが、この期、南部人が少なくとも大妥協の恩恵の最大のものの一つであるテロトリーにおける奴隷制問題から解放されて、様々な方策の模索と検討を重ねるゆとりと機会に恵まれたことを示している。それと同時に、同会議の広域化と定着化が読みとれる。また討議された諸事項が南部開発、すなわち経済的自立、体質改善を意図した少なくとも（南部的に）理に適ったコースを追求しようとした期であることを教えている。

前後16回に亘った同会議の草創から終末までを追うことによって、次のような事柄を知ることができよう。

これらの諸会議は、その名「南部」の示すごとくセクショナルな性格を持っていた。「商業」——その語はこれらの会議の真の姿や目的を適確に表現してはいないが、全く誤った呼称であるとも言えない。参集した代表の地域、階層の多様性と選出方法からして、内戦前の多くの南部人が南部の経済的、物質的諸問題について、どのような考えを抱いていたのかをうかがいうる。

さらに南部の世論と問題点を代表的にとりあげたと考えて差支えないこれらの会議が、そうなることを極力避けながら、如何にして政治的次元にまで上昇したのか。一方、州権とセクショナリズムとの関係においてどのような役割を果たしたかについてうかがい知りうる会議、乃至は運動であったことが議題と、提唱者に見ることができよう。同会議の考察が、南部セクショナリズムの生成と形質の理解に有用であるとする所以である。

（註）

- ① Clement Eaton, *A History of the Old South* (1963), p. 442.
- ② Michael Kraus, *Writings of American History* (1953), p. 313. 「最近の研究において、旧南部が敗退した原因の一つとして、旧南部諸州がそれぞれ州権を強調したために十分な徴兵が行なわれなかったことがあげられている。」
- ③ Arthur Charles Cole, *The Irrepressible Conflict 1850—1865* (1934), pp. 70-71.
- ④ Owen Peterson, “Speaking in the Southern Commercial Conventions 1839-

1859,” in Waldo W. Braden, *Oratory in the Old South* (1970), pp. 190-191; Herbert Wender, *Southern Commercial Conventions 1837-1859* (1930), p. 10. より作成。ただし両者とも異なった時点で区切っているが、三分している点では一致している。しかし該運動の性格からして四区分する方がより真相に近い。なぜなら一大転換点として、カンザス・ネブラスカ法に象徴される大陸横断鉄道問題の激化、この法案審議の際に暴露されることになる大妥協原理（住民主権論）の多義性すなわち危険性、共和党の誕生などをみた1854年を分水嶺として、前記二者が一括した会議を二分すべきだと考えるからである。なお大会への参加者数がしばしば概数であげられるのは、ほとんどの会議に出席したド・パウによれば、多くの代表が公式名簿に署名しなかったことに起因する。Cf. Peterson, *op. cit.*, p. 193.

（二）南部商業会議の草創

南部商業会議の起源は19世紀初頭、およびアメリカ産業革命期に遡上する。この期、北部における製造業、資本、人口の増加が南部人に警戒心をおこさせた。北部の繁栄は南部の犠牲の上にあると疑った南部人が、北部の経済的優位に対抗しようとの手段を考察しはじめた。たとえば関税問題のごとく、その本来の意図するところは（特に米英戦争によって刺激された）国家的利益を考慮してのものであったが、或る地域が他の地域を犠牲にすることによってでなければ成立しえない手段であることが認識された。そこからナリフィケーションの危機が招来されたのは周知の事実である。

棉花州や煙草州は、他のどの地域よりも一層海外通商への関心が深かったがゆえに、旧来のレッセ・フェールの熱烈な信奉者であり、鎖国的性格を持つ政策には強い反対を示した。ヨーロッパ諸国の競争を排し関税で保護された高価な品物を北部から購入しなければならないことに耐えられないとして、ヤンキー製品不買同盟がしばしば結成され、南部商人たちはアポリシヨニストとは直接、或いは間接にせよ取引しないことを誓った。^②

そしてそうすることが北部に反省を促がすことになるとも信じていた。「我々の取引は北部にとって必須である。もしそれを欠くならば、北部の諸都市は漁村にすぎないし、もしそれを排除するならば、北部の諸都市は急速に没落す

るであろう。我々は北部依存を断とうと思う。然して我々の都市は榮え、我々の取引は増し、我々の市民は現在ニューヨークに独占されている巨大な商業利益を享受し、連邦政府のすべての負担から解放されていくらかの報いを得るであろう」。これが19世紀第2世代初頭の南部人の一般の見解の一例である。

南部人は次第に、従来の孤立的で個々ばらばらのボイコットや経済的報復手段の無力さを知るとともに、ボイコットを可能ならしめるには南部における産業の多様化による生産力の向上、乃至は北部を介させずに南部諸港から直接にヨーロッパと取引すること、すなわち南部の商業的、経済的自立の必要性を認識するに至る。しかしここには後期の諸会議に顕著となる政治的独立までは意図されていない。

かくて南部の経済的凋落の原因が連邦政府の北部偏向的な不平等政策にあるとする人々と、その原因を主として南部が北部やヨーロッパに産業的、商業的、金融的に依存し、加うるに単一栽植農業に過度に集中没頭してきたことに帰するグループとが、共通の場となしうる商業的独立の運動がおこったのである。

ここで注目すべき両者の一致点は、南部の経済的な立ちおくれが奴隷制に起因するものではないとする考えであった。勿論、南部にも奴隷制はそれ自体不利益であり、白人労働者の門戸を著しく狭めその労働力を十分に利用することができず、且つ移民の導入にも阻害的作用を働いていることに気づいていた人々もあつた。また奴隷労働と競合関係にあつて、そのゆえに犠牲を強いられ、従つて異を唱える人々もあつた。しかし彼らは明らかに少数派であつた。そして奴隷制が経済的立ちおくれの真因とは考えない多数派が、一つの組織に参集したのである。

しからは奴隷制を存続させながら経済的独立を達成する法や如何？——それが南部商業会議の出発点でなければならぬし、そこに特殊な南部経済振興策が誕生してくるのである。

然して南部を支えるものが農産物であり、それがヨーロッパ市場との取引において存立するものである限り、対欧通商は農業と同様に南部の富にとって本質的なものであつた。運動が対欧直接交易大会からスタートをおこしたのは当然というべきであろう。

多分、南部商業会議の第1回目として記録されてよさそうにみえるのは、1837年10月16日ジョージア州オーガスタでの会合であろう。この会合に代表を送ったのは、サウスカロライナとジョージアの僅か2州であり、「南部」規模と呼ぶには余りにも当らないが、カルフーンがこの会合に常ならぬ大きな関心を払ったことと、これ以後の諸大会で常に叫ばれた——それだけに実現困難であった^⑦ということになるが——問題がいち早く登場した点で注目に値しよう。

同大会開催の直接的動機は1837年のパニックにありとされている^⑧、空気は極めて楽天的であった。高率保護関税と差別的な連邦政府のやり方を非難する言葉で幕が開かれたが、北部の市民に対する不平は認められない。議長マクダフィの報告書は次のように概括している。すなわち1836会計年度において、ニューヨークは同市の輸出の6倍を輸入し、南部諸州は輸出額の四分の一しか輸入していない。しかもその大半は西印度諸島およびメキシコの産物であって、南部の主要産物である棉花などの引換ではないという重大な事実がある。また全合衆国の総輸出額の五分の四は南部の農産物であるのに、輸入が上述の状態にとどまるのは何故であるか。それをさらに言うなれば、全国家的利益の五分の四をも産出しながらそれを北部にゆだねているのは愛国心の軽重を問われていることに等しいのである。続けて、商業的独立は政治的独立にとって不可欠であることを指摘した後、経済的後進性克服の法に言及している。

曰く、確かにニューヨークは貿易港としての自然的条件には恵まれている^⑨、たとえばニューヨーク＝リヴァプール間と、チャールストン＝リヴァプール間の運賃は後者の方が安いし、倉庫料、労賃その他生計費の低さにおいても南部は有利である。棉花は他の如何なる北部諸都市でよりもニューオリンズ、モービル、サヴェンナ、チャールストンの方が廉価に購入しうる。北部を通しての間接貿易より、南部とヨーロッパ諸国との直接貿易の有利さを否定する条件は何一つあげえない。除去すべき唯一の、そしてそれが最大の阻害条件なのであるが、それは棉花購入、輸入品購入、小売商人への卸しなどに必要な「貨幣資本の不足」であった。

マクダフィ報告にみられる南部輸入業者たちの、特にプランター階級に対する、次の要望はまことに尋常なものであった。南部の輸入業者たちは北部商人

よりも顧客であるプランターに近かったし、南部人であるがゆえに彼らの欲する品目、量についてよりよく知っていた。品物調達の速度もまさるはずであった。このことから、消費者としてのプランターには短期信用制度が、そして生産者としてのプランターには他企業への資本投下が推奨された。

プランターが長期信用制度を望むなら、売りつける商人は長期の掛け売りを余儀なくされ、その結果、商人へ卸す輸入業者は巨大な手持資金を準備しておかねばならぬ。プランターの通例である借金癖を改めるならば、外国通商に必要な資本のほとんどが確保され、プランターも商人もともに益されよう。現金買い、もしくは短期信用制度で、前年の収入によって次の年の経費を賄うような方法こそ望ましいのである。

およそ物を生産する階級で、棉花生産者（プランター）ほど生産過剰に悩まされた人々はいない。なぜなら彼らは誇り高き個人主義者であり、且つ極めて広大な地域にひろく拡散的に存在していたがゆえに相互の連絡、乃至は協同による生産抑制ができなかった。加えてその年の棉花収入の総額をあげて、愚かにも次の棉花生産をふやすための土地と奴隷の購入に充当したからである。

土地と奴隷に全収入を注ぎこむ代わりに、その中の適当な部分を何かより利潤を見込みうる企業に投資するか、或いは農業の多角化に意を用いて然るべきである。マクダフィ報告は次のように結んでいる、すなわちプランターの実収の半分を、それも僅か数年間流用すれば、南部の外国通商に必要な資金は十分に確保されるであろう、と。

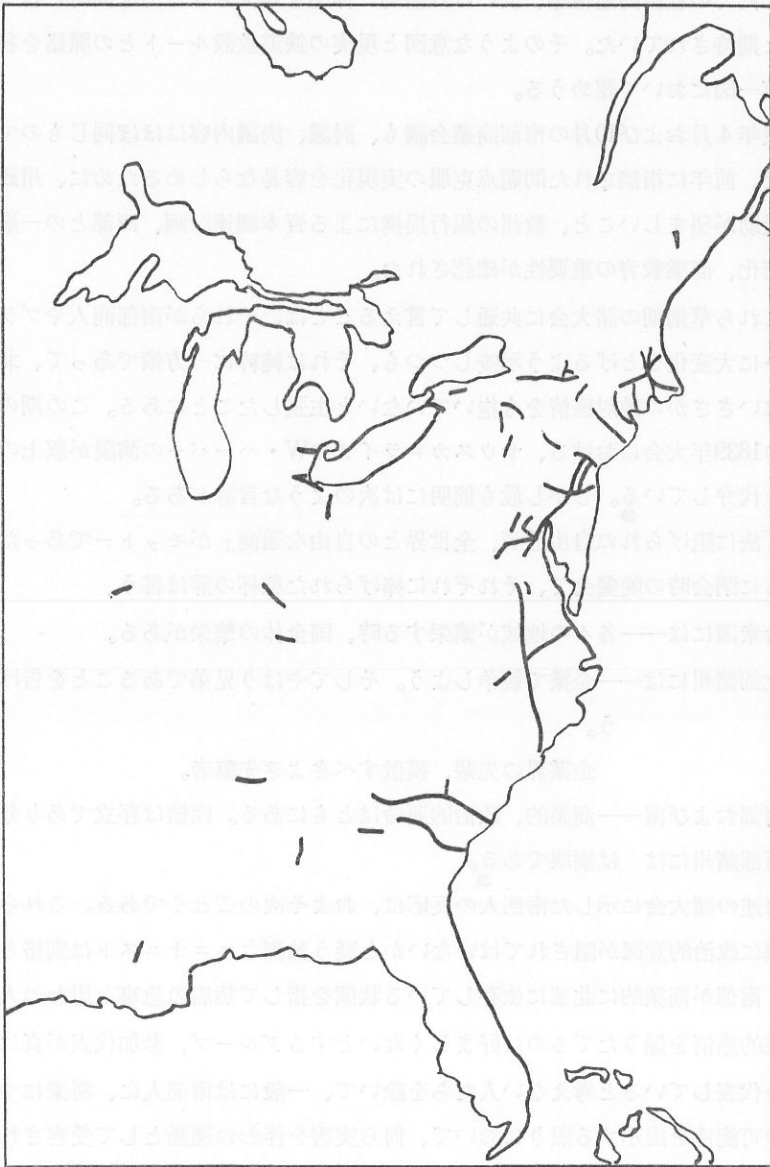
同時代人がどれほど認識していたかは知らず、それはプランター経済を基本的に改変させるよう要求したものであった。

資本は成長しつつある西部のためにも、換言すれば西部を政治的、経済的に南部側につなぎとめるためにも必要であった。大西洋岸南部の輸入都市とミンシッピ大溪谷とを結びつける鉄道は、西部人には必需品を距離にして二分の一、時間で言えば六分の一の地点から、人為的で高価なルートを介さずして入手しうる利点をもたらすであろう。そしてそれによって南部の商業都市は甚だしく活況を呈することができる。

実際にそのような鉄道建設は進捗しつつあって、西部と南部の間の、或いは

旧南部における経済的独立の試みと挫折——南部商業会議（山口）

第一図 1840年における敷設鉄道（営業2,918マイル）



Clifford L. Lord and Elizabeth H. Lord, *Historical Atlas of the United States* (1953), p. 77, Appendix V.

南部の鉄道は、南北よりもミシシッピ河を指向して東西に伸びようとしている。

南部内での社会的連帯感、或いは政治の一体感を増大させる力を同時に持つものと期待されていた。そのような意図と現実の鉄道敷設ルートとの脈絡を我々は第一図において認めうる。

翌年4月および10月の南部商業会議も、討議、決議内容はほぼ同じものであった。前年に指摘された問題点克服の実現化を容易ならしめるために、州政府の援助が望ましいこと、数州の銀行提携による資本調達計画、西部との一層の緊密化、商業教育の重要性が確認された。

これら草創期の諸大会に共通して言えることは、それらが南部商人やプランターに大変化をとげるよう示唆しつつも、それは純粹に一方策であって、北部にはいささかの敵対感情をも抱いていないと主張したことにある。この期の最後の1839年大会における、サウスカロライナのW・ハーパーの演説が叙上のことを代弁している。しかし最も簡明には次のような言辞がある。

「法に阻げられぬ自由通商、全世界との自由な通商」がモットーであった。さらに閉会時の晩餐会で、それぞれに捧げられた乾杯の辞は言う、

合衆国には——各々の地域が繁栄する時、国全体の繁栄がある。

北部諸州には——企業で競争しよう。そしてやはり兄弟であることを告げよう。

企業界の先輩、模倣すべきよき先駆者。

南部および南——商業的、政治的運命はともにある。団結は存立であり分裂西部諸州には——は崩壊である。

前述の諸大会に示した南部人の反応は、およそ次のごとくである。これらの会議に政治的意図が隠されていないかと疑う熱烈なユニオニストは別格として、南部が商業的に北部に依存している状態を指して焦眉の急事と思わぬ人々、地域的感情を煽りたてるのは好ましくないとするグループ、参加代表が真に民意を代表していると考えない人たちを除いて、一般には南部人に、将来についての可能性を提示する限りにおいて、何ら実害を伴わぬ運動として受容された。

「南部人がこの運動を成功させ、凋落しつつある良港がかつての栄光をとりもどし繁栄することを祈った」ニューヨーク・サン紙は、この運動には政治的意図が含まれていないと解した好意的な北部の反応の一例である。

（註）

- ① Wender, *op. cit.*, p. 431.
- ② J.B. McMaster, *A History of the People of the United States from the Revolution to the Civil War* (8 vols., 1883-1913), VI, pp. 38-40, 281, 282.
- ③ この考えは1860年になっても変らなかつた。
- ④ McMaster, *op. cit.*, p. 282.
- ⑤ John G. Van Deusen, *The Ante-Bellum Southern Commercial Conventions* (1926), p. 7.
- ⑥ See Herbert Aptheker, *The Labor Movement in the South during Slavery* (1961).
- ⑦ 拙稿「ジョン・C・カルフーン——“競合的多数”への道」文化史学第27号（昭和46年11月）。
- ⑧ Wender, *op. cit.*, p. 10.
- ⑨ 南部諸港は港湾が浅いと、湾口に障害物があるなどの不利な条件を大なり小なり有していた。
- ⑩ Wender, *op. cit.*, p. 16.
- ⑪ 前掲拙稿参照。
- ⑫ Peterson, *op. cit.*, pp. 200-201.
- ⑬ Wender, *op. cit.*, p. 17.
- ⑭ *Norfolk Herald*, March 30, 1838; *Savannah Daily Republican*, April 4, 1838, in *ibid.*, p. 26.
- ⑮ *New York Sun*, April 27, 1839, in *ibid.*, p. 27.

（三）広域化

南部商業会議の広域化は自然発展的というよりは少し変った仕方でもたらされた。

1845年3月、アーカンソーのビンガム大尉が、インディアン・フロンティアに至る軍用道路開発の使命を帯びてメムフィスに到着した。それに応じて急遽7月4日に開かれたメムフィス大会は、準備期間の乏しさが災いして十分な代表を集めることができなかった。11月12日に再びその問題を取りあげるべく関係各州に発せられた招待状は、討議すべき事項として（一）ミシシッピ溪谷の軍

事的資源、(二) ミシシッピ河および支流の開発。海軍艦艇の航行可能性を含む、(三) 西部武器製造所、(四) 公有地を通過して南西部に至る軍用道路、(五) その他棉花栽培、農業改革、鉄道建設、南部製造業振興策などをとりあげている。

政党色を極力もちこまぬよう、連邦政府権力の関与は、ことの性質上必要ではあるが満場一致の時にのみその発動を受入れるとの態度が示された。17州からおよそ600名の代表が参加したが、最も多く代表を送ったテネシー州（235名）はこの大会の公正さを印象づけるために、カルフーンとクレイの両者の出席を要請した。

このようなことから本大会がセクショナリズムの色彩をほとんど帯びていないものと見做されているのだが、出席を拒否したクレイは別として連邦政府による内部開発には真っ向から反対してきたカルフーンが、はずまぬ心をおさえて参加にふみきり会長をひきうけたのは、この大会の政治的意義をよく認識してのことであった。^①

彼は未だ大統領の座につくことを諦めてはいなかったし、そのためにも南部と西部が政治的に団結するのが好都合だと信じていた。代表は南部および南西部を中心に、デモクラットもホイッグも、商人、プランター、法律家その他産業界、学識経験者など多彩でヴァリエティに富んでおり、主題の重大さと、カルフーンの出席によって北部の注目をも集めた。ここに同時代人が「カルフーン大会」と称した会議が始まったのである。^②

同時代人と等しく我々の関心をそそるものは、彼の従来の連邦政府によらない内部開発(州権)論と、討議事項が必然的に持っている連邦政府介入の範囲が、どのような地点で調和するかという問題であろう。州権論はしっかりと保持されねばならぬ一方、西部と南部の二地域に亘る広大なミシシッピ河の開発改良は、1州乃至は数州の協働によって達成されるようなものではない。然してこの際、どの程度にまで連邦政府の権力を認めるべきか。^③

カルフーンは、1時間にもおよぶ開会演説でこの問題を次のように理解した。伝統的州権論と弱い連邦政府論を主張する一方で、一種の飛躍を示したのである。すなわち原則として内部開発は連邦政府の管轄下におかすべきでない、なぜならそれによって常に地域偏愛や嫉視反目が作出されてきたからである。連

邦政府は個人の力でおよびうる範囲の事業は個人にまかせ、州と個人の協力によって可能な分野はそれらの協働に帰せしめ、個人と個人、州と個人のいずれが協力しても達成しえない領域のみにこそ、連邦政府は動いてよいのである。

然して支流を含め「内^{インランド・シー}海」とでも呼ぶべきミシシッピ河改良問題は、その最後のカテゴリーに属し、従って連邦基金によって成就されるのが妥当である。広大な「内海」は、連邦政府が大西洋岸、メキシコ湾、五大湖などを守備し保護し、開発改良するのと同様に扱わるべきである、と。演説の中で西部代表から盛んな拍手を受けたのはこの部分であったと言われている。

鉄道建設問題については、間接的な政府援助が望ましいとされた。連邦政府が鉄道に土地を附与することは、その周辺の地価の騰貴をもたらすがゆえに、州の財産を向上させることによって州権論の原則に反することにはならない。同時に鉄道の撤廃が行なわれるとしたならば、1マイルにつき2,000～3,000ドルの補助金を与えられるに等しいと主張された。ミシシッピ河と鉄道——この二つの支柱こそ南部と西部を社会的、経済的、政治的に同一陣営の中に組みこむ手段であり、カルフーンをして再び初期の連邦政府援助下の内部開発という考えに立ちもどらせた材料であった。

イリノイ州代表の質問に答えて、彼は目的が国家(防衛)的性格を持つときには連邦政府が予算充当をなすのは当然であり、ミシシッピ河問題は正しく法律論から言ってもそれに相当するものであることを再確認している。

農業改革、製造業振興についての討論と決議の採択があったが、それらと州権論との間には勿論調整さるべき矛盾は存在しなかった。

メムフィス大会での決議は南部こそぞっての賛意で迎えられたのではない。ことにカルフーン発言をめぐって彼の友人はその態度の急変ぶりに驚き、或る者は連邦権力を極めてリベラルに解釈したと非難の声を浴びせた。一般に言って、とりあげられた議題はどれもこれも成就させたいものであって、それには異論のないところであるが、それに要する膨大な資本を誰が、どのようにして調達するかは大問題であった。

さらにミシシッピ河が政府援助によって安全な航行をなしうるよう改良されるなら、それ以外の河川に政府援助を与えるのは不可であるとする如何なる法

的な根拠もなく原理も失われるではないか。合衆国内のすべての河川はそれぞれ国家利益、国家防衛にかかわりあいを持っているはずであり、その限りにおいて何らミシシッピ河と差別を受けなければならない筋合いはない。すべての州の経費（連邦政府予算）でミシシッピ溪谷が開発されるなら、他の諸河川がどうしてそれを要求して悪いことがあるか——特例を認めることは原則を破ることであった。

カルフーン演説および該大会の決議を歓迎した南部の論説は、およそ次のように括ることができる。従来、国会は北部や東部に比し南部および西部に対して冷淡であった。我々は権限の許す範囲内において国会が速やかにこれらの決議を実行に移すよう警告する。「もし国会がこのさし迫った問題に対処しないならば、南部の不满は憤りとなりそのような政府に尊敬と愛をもちうるか否かを問うようになるであろう」と。しかしそのような言辞の表明が散見されたにもかかわらず、この大会は平和と調和の印象を与えたのである。^⑧

参加州の中に西部を加えて広域化しながら、南部内での異なった世論を背景にして提出された該大会の陳情書は大統領ポークによって拒否された。カルフーンの投じた一石は最近の史家によって、「彼は次の20世紀において発展的な姿をとった“regional planning”の構想をこの時点で予測していた」と解されているが、以後の大会に30年代には見られなかった州権対連邦政府論が、南部の経済的自立の問題と絡みあって登場するような波紋を描いた点で一つの転機を画するものとして把握しうる。40年代最後の大会である太平洋鉄道大会がそれを裏づけている。カルフーン演説の示すごとく、正しく30年代が連邦支援なしの南部経済独立をはかったに對し、この第2期では連邦支援が条件づきながら正当であると主張されて一つの転換をみせている。^⑩

この間、メキシコ戦争により歴大なテリトリーを獲得し、合衆国は太平洋岸に接するに至った。遠隔のこのテリトリーを確保するためにも、また南部の政治力向上のためにも太平洋鉄道、特に南部ルートによるその実現が追求された。かくて1849年10月セントルイスで、5日おくれでメムフィスで大陸横断鉄道に関する大会が開かれた。

この兩大会で、それぞれ東の起点とルート設定をめぐって政治的、商業的な

特殊利益の相違が露呈されたが、^⑩いずれもこの鉄道が南部と西部に必須であり且つ国家的大事業と考えられるがゆえに政府援助を受ける資格のあること、然してそれは全合衆国民の利益になると主張された——事實はそれが南部と西部の提携、両地域の農業、商業、鉱業的資源にとって不可欠であると考えられていたのであったのだが。^⑪

（註）

- ① Robert R. Russel, *Economic Aspects of Southern Sectionalism, 1840—1861* (1924), p. 124; Wender, *op. cit.*, p. 49.
- ② Peterson, *op. cit.*, p. 203.
- ③ Wender, *op. cit.*, pp. 49—69, esp. p. 55.
- ④ Peterson, *op. cit.*, p. 203.
- ⑤ Wender, *op. cit.*, p. 57; Peterson, *op. cit.*, p. 203.
- ⑥ 前掲拙稿参照。
- ⑦ Wender, *op. cit.*, p. 66.
- ⑧ *Ibid.*, p. 67.
- ⑨ Eaton, *op. cit.*, p. 333.
- ⑩ Peterson, *op. cit.*, pp. 202—203.
- ⑪ *Ibid.*, pp. 205—206; Van Deusen, *op. cit.*, p. 26.
- ⑫ Russel, *op. cit.*, pp. 126—127.

四 定 着 化

1852年、ニューオリンズのド・バウは南部人の態度にいらいらしていた。「我々が過去を振りかえってみる時、絶えずではなく時たまにしか目を覚ましていなかったのは不幸なことである。やりとげようとの努力が足りなかったのは残念なことである。我々は大会に参加した。しかし会期が終ればそれっきりであった。休会中に決議案を立法化させる力は誰も持たなかったし、すべてが急速に忘れさらられてしまった」。このようなことを防ぐには、大会を間歇的ではなく毎年定期的に南部の主要都市で開くような恒久的組織に改変する必要があった。^①この定着化を一つの転機と見ることができ、同時に1850年妥協の余

恵の一つがそれをもたらしたものと考えて差支えない。

それは以下の実質を補填して一層、我々の認識を確かなものにするであろう。

端的に言って、それは大妥協が南部分離派の勢力を削ぎおとしたことに起因する。次のような経緯を想起してみればよい。

妥協前のユニオンの危機の際、すなわち1849年カルフーンはワシントンで南部出身の上下両院議員集会を催し、南部の統一と団結を説いた。メキシコ戦争の勝利の分け前を排除するようなウイルモット条項、絶え間ないアボリシヨニストのアジテイション——それらに対して南部は党派をこえて団結していることを北部に示す必要があった。彼によれば、それを示すことがユニオンを救うことであった。なぜなら北部は統一された南部を見て圧迫を続ける危険を悟るであろう。もし北部の態度が変らねば、その統一下に連邦脱退を考慮してもよかつた。この脅迫的和解体制(カルフーンの南部運動^{サザン・ムーブメント})は南部ホイッグの賛同を得られず、またデモクラットの中でもコップ、大統領ポークなどから危険視された。結局、出席議員88名のうち、カルフーンの宣言に署名したのは48名であり統一南部を北部にみせつけようとの企ては逆の効果を示すことになった。

カルフーンはアボリシヨニストが次第次第に奴隷制を崩していく場合にとるであろうと考えられた一連の方策を描いた。それによれば北部が最後には全准州を独占し、自分の側に全体の四分之三を得るに十分な州の数をつけ加え、それから奴隷解放の憲法修正を通過させるに至るであろうというものであった。^②

災厄はここでとどまらない。解放後、奴隷たちは「連邦政府の下で投票権が与えられ、また官職につくことによって旧主人たちと政治的にも社会的にも平等の地位」にのし上がり、北部の支持者たちの政治的仲間となり彼らと一緒に行動し、黒人と彼らと手を結ぶ無頼漢的白人は、連邦の官職と叙任の主要な受け手となるであろう。かくて前主人たる人種に残された唯一の道は、先祖代々の家郷を放棄しこの国を黒人たちにゆだねる以外にないであろう、と。^③

その予測は再建期の共和党急進派計画を正しく言いあてたに等しいものだが、彼のおこした「南部運動」は、翌1850年の大妥協をめぐって「ユニオン運動」という反動で迎えられた。

最初ホイッグから、すぐに党派をこえてスタートしたユニオン運動の一例を、

該妥協案を真っ先に受入れたジョージアの場合にとってみよう。ジョージア州の立憲連邦党は、ツームズ、スティーヴンスと、最近合衆国議会の下院議長に選ばれたコップらにより超党派的運動として指導されていた。その党は州議会で大差をもって大妥協採択を可決した。^④しかし同時にこの妥協が破られるならば、ジョージアは分離を辞さないと北部に警告することを忘れはしなかった。このジョージア方式が南部諸州一般に受け入れられた。^⑤

このように大妥協により1850年～51年の連邦分離運動が挫折してから、ド・バウ、ヤンシー、ラフィンなどの猪突派たちは、その運動の弱点を悟るとともに、考慮しなければならない経済問題に関心を向けた。それは多くの南部人が今や奴隷制問題から解放されて、他の諸問題に取組むことができたことをも意味する。ここに大妥協そのものと、それ以後の南部商業会議の転換点をもたらした両点で注目すべき節目がある。

さて分離派は政治的にも、また上述したごとく経済問題にも極めて敏感であった。彼らがシュワードが1850年3月11日の演説において正しく南部の弱点をついた言葉「南部人の欲するのは政治的均衡であります。ところで一切の政治的均衡は、そのよって立つ物質的均衡を必要とするものであります。そして物質的均衡なしの政治的均衡と言うものは価値がないものであります」を、どのような気持で受けとったであろうか。ここにおいて南部の経済的後進性克服のため、商業会議の恒久化と、それにとりあげらるべき主題が次のように設定された。(一)南部経済発展策の継続的探究、(二)成長する北部勢力に対抗する方策、(三)南部人心統一の策、そして就中、決め手ともいふべき(四)鉄道建設の問題。^⑥

南部の経済的独立の一大支柱にあげられた鉄道について言えば、50年代における南部の鉄道建設ぶりは目覚ましかった。その増加率は他のどの10年間のそれよりも高い、それは一方では40年代に南部が他のどの地域よりも立ちおくれたことを証拠だててもいる(第一図参照)。しかし広汎な地域に建設された鉄道は2,000マイルから1万マイルへと飛躍し、50年代末から60年では全合衆国の敷設マイル数の三分の一以上に達した。^⑦

これらの鉄道は確かに南部諸州間の接触を緊密化し、比較的奥地のヨーロッパ

たちと市場との結びつきを容易にした。そのためプランターの生活の一部とでも言うべき旅行はロマンチック・ムードを失いはしたが、社会的連帯感や政治的一体感は増加した。

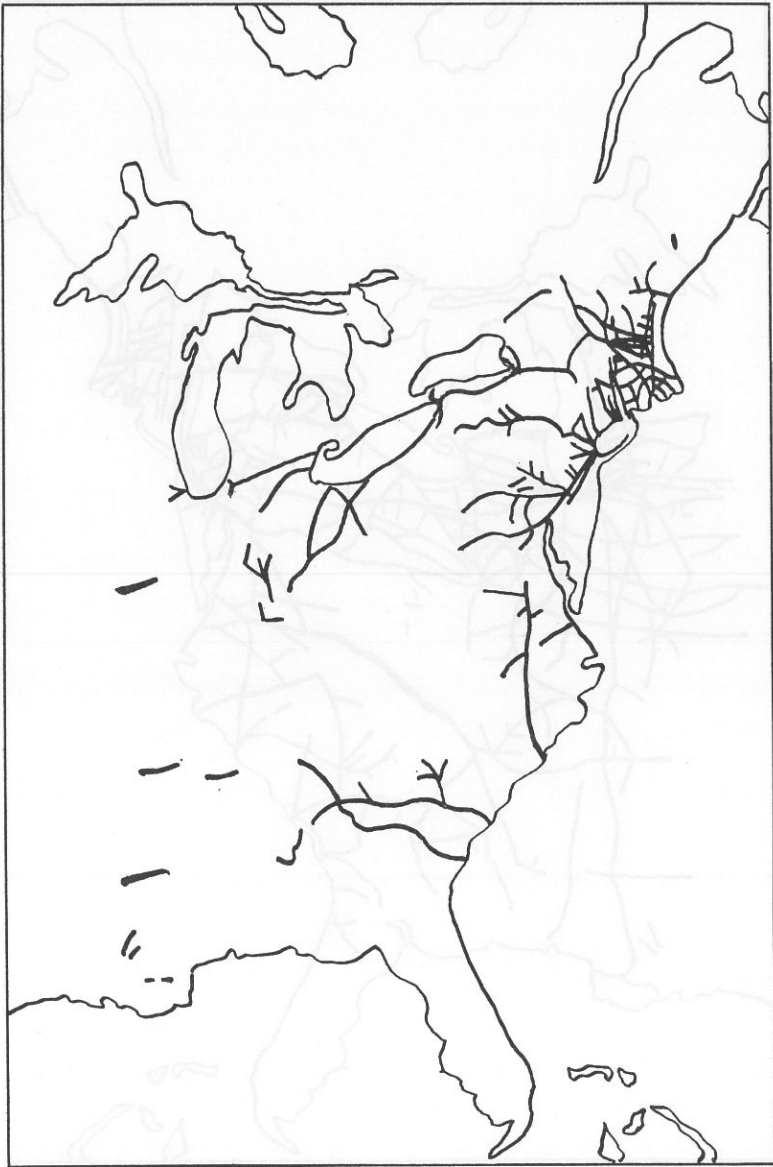
この交通の発達が南部セクショナルリズム形成に大きな影響を与える。南部内の一層の緊密化が知覚される一方、鉄道建設が北部において遙かに進んでいることが瞭然となったからである。

さてこのような南部における鉄道の立ちおくれは通常、次のように説明される。すなわち建設に要する資本は北部および東部での調達に比すれば、南部では大きな困難に逢着した。問題は、この困難が実際には南部資本が圧倒的に土地と奴隷に投下されることによって不可塑的で、流動性を失っていたことに起因するのを同時代人が認識しなかったことにある。南部の不幸は産業の多角化への試みが皆無であったことにあるのではなく、むしろ多くのそのような提唱にもかかわらず実現を不可能にした資本の流動性の乏しさにある。かくて産業の多角化へと導きそうに思える鉄道さえも、棉花王国をより拡大化させる方向に作用し、それは生産量の競争激化を招いた。予想された急速な産業化もまた実現されることがなかった。

⑩ ひるがえて合衆国全体の鉄道体系を一瞥すると、それは北西部と東部を、南部と南西部をしっかりと結びつけるような線に沿って発展しつつあった。建設は南北両セクションをつなぐ方向にではなく、いずれもセクション内の東西を結ぶラインをとった。第一図において指摘したこの傾向が一層顕著になったことは第二図により容易に看取できよう。第三図に至っては、まさに南北が二つの分断された地域であること、将来の二つの国家であることを示すような敷設状況をみせている。特に「アーロンの杖」太平洋鉄道は早くも地域闘争の形をとってあらわれつつあった。

⑪ 低南部も徐々にオールド・ドミニオン或いは大西洋岸南部諸州と同じ状態に近づきつつあった。あらゆる事象がセクショナルリズムを強める方向にあった。大妥協のもたらした小春日和はあったが、基調はそうではなかった。南部がユニオンの中であって「平等」を維持したいならば、或いはユニオンを離れて独立したいならば、南部の頼みとしうるのは自らのみであること、南部は団結し

第二図 1850年における敷設鉄道（営業9,021マイル）



Lord and Lord, *Historical Atlas*, p. 77, Appendix V.

第三図 1860年における敷設鉄道（営業 30,626 マイル）



Lord and Lord, *Historical Atlas*, p. 78, Appendix V.

協同する方法を見出すべきであること、自らの資源を開発しその富と人口を増加すべきであること——などについて考える人が数を増した。勿論、奴隷制を維持しながらという大前提に立って叙上の達成を考える人々のことである。ここに同じ農業地帯として盟友関係にあった西部との離反の一因が浮上する。南部は従来より孤独感を深めつつあった。

1852年までに南部商業会議の定着化が企てられる条件は出揃った。ド・パウの焦慮は以上のことを踏まえて過ぎ来しかたの諸大会をふりかえる時、一層かきたてられたのである。

1852年ボルチモア市商業会議所の主催した大会は、同市を商業的中心地に仕立てようとの意図が見えすぎて必ずしも南部での評判はよくなかった。1853年と54年の兩大会は華々しいものの代表であった。大妥協の余恵の最後の部分と、新しいセクショナルリズム萌芽の二つの併存がかかる状況を生んだと考えられる。北部各紙は特派員を送ってその関心の強さを示した。大会への代表たちはそれぞれ会場へ参集する際に、或る鉄道会社からは運賃半額、或る会社では無料といった特権が与えられたが、それらは南部人が如何にこれら大会に関心と期待を寄せていたかを物語っている。

このように全国的関心を集めたこの期の諸大会には、南部内の意見衝突は認められない——というより極力それを避けて調和を確認することに努力が注がれたと言えよう。大会会長はくり返し政治的意図のないこと、セクショナルリズムの傾斜を避けること、如何なる地域をも敵視しないよう注意を喚起した。セクショナル・マンとしてではなく、真の南部人或いは西部人として合衆国憲法に与えられている権利の範囲内で行動し、それらの地域の人々が負っている負担を軽減することのみを考慮するために参集したのでであると説明された。

対欧直接通商、農業の多角化、製造業の振興、海港の改良等々は何時に変わぬ討議の対象であった。さらにそれらすべてが達成されたとしても、南部の教育が非南部的である限り何の意味もない。北部の教師、北部からの教科書を使用しながら青少年に南部を敬愛する気持を持たせようか——だから南部教育も熱心に討議される必要があった。リヴァプールは棉花を生産もしないし消費もしない、ただ独占するだけである。それをイギリス以外の国、たとえばフラ

ンスやベルギーなどと直接に取引してみてもはどうだろうか。農業博や展覧会、南部郵便事業の改善等々——かくも議題が殺到したのは、少なくともこれら大会を構成する多くの人々の熱意のほどを反映するものであった。

しかしながら当時、最も関心を集めた中心テーマは「現代世界の大事業」、すなわち太平洋鉄道建設案であった。ニューオリンズ・デルタ紙は「これこそ他のすべてに冠たるアローンの杖であり、偉大な万能薬である。それは南部を北部隷属状態から救出し、我々の手許に未発掘の富をもたらしてくれるであろう。都市を築き、船を造り、工場を興し、我々の子弟を育てあげるであろう」（1853年6月24日付）、と大きな期待を寄せているが、デルタ紙は万能薬にはそれだけ強い副作用があることに気づかなかったのであろうか。

それはカリフォルニアと大西洋岸との間の経済的関係のためにも、フロンティアをインディアンの襲撃から守るためにも、軍事的見地からしてもまさに国家的要請であり事業であったが、ルート設定に伴う多様な利害関係、構想の大きさ、規模の雄大さからして到底、国家の直接援助なしには達成されないものであった。

加えて1837年恐慌以後、各州財政は慢性的に悪状態にあり巨大事業の負担能力を欠いていた。従ってたとえばメモフィスのJ・T・トレゼヴァントは、先ず幹線は連邦政府が建設すべきであり、それに接続する支線については公有地を関係諸州に存分に払い下げるのが至当であると考えた。しかしミシシッピのクイットマンは、政府援助の増大は政府干渉の増大につながるとして反対した。テネシーのJ・ベルは、クイットマンの意見には賛成できなかった。

かくて太平洋鉄道建設計画は、かつてカルフーンの提起した州権と連邦政府権力との調和点の発見が未だ果されていないことを人々に想起させ、いま一つの難点ルート決定には確たる地点をあげえずアイオワ～テキサス間のどの人々にも納得のいくような線を研究することにして不満足な結着をつけられた。

前述した一連の大会についての南部人の評価は一様ではない。ニューオリンズの一紙は1853年6月10日付の社説において、採択した決議がいずれも調和を重んじたことは「その限りにおいて結構」であるとしても、問題は如何にそれが成就されるかと言うことにある、と正しく言いあてている。

大会で利害が一致しないときには、競合関係にある当事者は、ただ総論についてのみ合意した。さらにここで留意すべきは次の点である。すなわち、たとえば鉄道建設の必要性という総論と、如何なるルートをとるかの各論との縫合のみならず、州権と連邦政府権限との調和といったより高次元の政治的問題が常に基底にあったことである。後者は言うまでもなく極めて全包括的ないわば国家の性格にかかわる性質のものであるが、これがルート設定というローカルな問題と密接し、奴隷制国家の存立問題とも直接していた点である。アメリカ人は確かにこの時点より、「アーロンの杖」をいま一つの契機に、二つの国家観の程遠からぬ激突を大妥協の小春日和の中ですでに触知しつつあったのである。

各論、すなわち南部内の利害対立にいま一度転じよう。たとえば南部諸港がヨーロッパと直接的な通商関係に入るという点は歓迎されたが、特定の港を指定することはできなかった。リヴァプールの独占排除のため、棉花集積所をつくることは南西部にとって必要であった。しからば何処が適当なのか。太平洋鉄道は最良のルートを通らねばならないが、それは結局は連邦政府の研究にゆだねられた。

大会の空気は実質的利害が衝突するようなことは何もすまいと言うようであった。これでは以前の諸大会と何ら変るところがないではないか、南部諸紙の見解はこのような一致を示している。¹⁹

しかしド・バウは決して悲観しなかった。このような会合が必ずよい成果をもたらし、論議はよい結果を生むまで続けられねばならぬと考えていたから、南部諸州の産業振興のためのこの組織がいろいろの都市で開催されることの方が好ましいのである。それによって多くの人々の関心を高めることができる。この組織は最高最強のエイジェンシーであると信じた。²⁰ 彼と同じ意見を持つ人人が南部に多く存在したに相違ない。なぜなら、いとも華々しく活発な大会がそれ以後も各市で開催されたからである。²¹

北部の保守的新聞は、これらの大会には政治的意図がないとの判断を下し、親南部紙はヨーロッパと南部が直接に通商関係に入るのは北部の利益にとって好ましくはないかも知れぬが、南部大衆にとっては全く必要なことだと認めた。ハーパーズ誌によれば「全く穩健でまともな大会」であったが、ニューヨーク

・トリビューン紙は手厳しかった。「南部の致命的な誤りは、富は主として外国との通商によってもたらされるものであり、鉄道や道路が海岸線まで建設され、そこから船が何千マイルも離れた土地へせっせと通うようになれば、すべての階級は富むに違いないと信じていることである……南部人が多く集まれば集まるほど、真理から遠ざかっていくことになるであろう。さらに厄介なことは、南部の“お偉方”がこれに出席していることである……通商というものは最も資本のある所に生じるものであり、大きな資本は奴隷州にありそうにない。資本がニューヨークへ、フィラデルフィアへ、ボストンへ集まり、そこが商都となったのは向背地に自由人を持っていたからである……また仮に南部の輸出が3倍になり北部のそれと等しくなったとして、一体それがどうだと言うのだ。全く取るに足らぬ金額ではないか……外国との通商が全面的にストップするなら、南部は破産するであろう。なぜなら南部は弱く、且つ棉花にのみ頼っているからである。しかし北部はその時に多角化した産業の強い力で立ちあがり、合衆国を全くの壊滅から救うであろう……」、と。

しかしともかく北部の一般感情は、これらの大会を反北部組織と見做して危険視するようではなかった。だが大妥協の余恵は漸減し、商業会議がそれにつれて政治的色彩を帯びつつあったのも事実である。

（註）

- ① *DeBow's Review*, XII, p. 560, quoted in Peterson, *op. cit.*, p. 207.
- ② Eaton, *op. cit.*, p. 540. なお拙稿『明白なる天命』とウイルモット条項——南北戦争への序曲」大阪経済法科大学論集第5号(昭和53年3月)も参照されたい。
- ③ Richard Hofstadter, *The American Political Tradition and the Men Who Made It* (1957). 田口・泉訳「アメリカの政治的伝統」(1959年)111頁。
- ④ Eaton, *op. cit.*, p. 546; Ulrich B. Phillips, *Georgia and State Rights* (1968), p. 164.
- ⑤ 「分離」という字句は南部の如何なる党派からも離れない。南部のユニオニスト或いはコーポレイションニストは、結局時間差はあっても分離に進まざるをえない、いわば条件づきのユニオニストなのである。See Dwight L. Dumond, *The Secession Movement, 1860—1861* (1931); Phillips, *op. cit.*, p. 165. 拙稿「旧南部分離運動の諸側面(上)、(下)」文化史学第23、24号(昭和43年5月、11

月)。なお50年代初期の分離運動については次をみよ。Arthur C. Cole, “The South and the Right of Secession in the Early Fifties,” *Mississippi Valley Historical Review*, I (1914), pp. 376-399.

- ⑥ Eaton, *op. cit.*, pp. 548-549.
- ⑦ Cole, *Irrepressible Conflict*, p. 71.
- ⑧ ホフスタッター著、前掲邦訳125頁。
- ⑨ Peterson, *op. cit.*, p. 207.
- ⑩ *Statistics of the United States Including Morality, Property, etc.* (U.S. Eighth Census, 1860), p. 333; Cole, *Irrepressible Conflict*, p. 69.
- ⑪ *Ibid.*, pp. 69-70; Kenneth M. Stampp, *The Peculiar Institution* (1956), pp. 391-392; Ulrich B. Phillips, *American Negro Slavery* (1929), pp. 395-398; Carter Goodrich, “American Development Policy: The Case of Internal Improvements,” *Journal of Economic History*, XVI (1956), p. 454; Raimondo Luraghi, “The Civil War and the Modernization of American Society: Social Structure and Industrial Revolution in the Old South before and during the War,” *Civil War History*, XVIII (1972), pp. 230-250.
- ⑫ 拙稿「カンザス・ネブラスカ法案——若干の背景」史林57巻5号（昭和49年9月）。
- ⑬ Avery O. Craven, “The Price of Union,” in George Brown Tindall (ed.), *The Pursuit of Southern History* (1964), pp. 279-280.
- ⑭ Wender, *op. cit.*, p. 119.
- ⑮ *Ibid.*, p. 103.
- ⑯ Russel, *op. cit.*, pp. 133-134.
- ⑰ Peterson, *op. cit.*, p. 108; Van Deusen, *op. cit.*, pp. 41-42.
- ⑱ これについては改めて述べるが、さし当り次を参照されたい。Goodrich, “American Development Policy,” pp. 449-460; Robert A. Lively, “The American System: A Review Article,” *Business History Review*, XXIX (1955), pp. 81-96; Milton S. Heath, “Public Railroad Construction and the Development of Private Enterprise in the South before 1861,” *Journal of Economic History*, X (1950), pp. 40-53. 拙稿「カンザス・ネブラスカ法案」。
- ⑲ Wender, *op. cit.*, pp. 117-118.
- ⑳ Peterson, *op. cit.*, p. 208.
- ㉑ Cole, *Irrepressible Conflict*, pp. 70-71.

⑳ Wender, *op. cit.*, pp. 116-117.

㉑ *Ibid.*

㊦ 尖 鋭 化

1854年は合衆国史上に一つの大きな転機を準備した。カンザス・ネブラスカ法と、「黒い」共和党の出現が地域間対立を再燃させた。小春日和は暗雲に掩われた。そして外圧が加われば内的軋轢が減少する、というほどにはこの期の空気は単純ではない。

南部内での軋轢、利害対立が表出するのに大した時間を要しなかった。モービル市——1845年および51年の大会で、その港湾改良を望んだ。ボルチモア市——1853年、メキシコ湾岸よりも中・南大西洋岸との接続をより重要だと考えた。このように南部の諸都市がそれぞれの利益を追求したことが、他の都市をして大会に冷淡な態度をとらせるようになったのは当然であろう。このような地域内エゴの対立と、地域間エゴの衝突がむしろ並行して政治的環境をよりタイトにしたように思われる。

たとえば新しい北部政治勢力の出現に驚愕したその余韻が残る1855年、商業会議の主催地ニューオリンズは可成り非協力的な態度をとり、加えて同市のビジネスマンは今までの大会が余りにもおしゃべりが多く実現可能な方策には真剣に取組んでこなかったと非難した。1856年1月のリッチモンド大会は、さらにそれに加えて厳しい天候と天然痘の流行に災いされて僅かに7州の参加をみたにすぎない。南部内での商業会議への対応変化が認められよう。

かかる環境下ではあったが、ニューオリンズ大会では太平洋鉄道建設計画が、リッチモンド大会では対欧直接通商がテーマとしてとりあげられた。就中、次の理由で特に我々の関心を惹くのは、アーカンソーのA・パイクが提唱した鉄道建設計画である。

「南部で赤ん坊が生まれて乳母にあやしてもらったガラガラから、冷い屍を掩う白布に至るまですべてのものは北部から来る。北部の織物工場でつくられたシャツから床をけて起き、北部産の羽毛の枕から頭をあげて北部産の洗面器で顔を洗いに行く。北部のタオルで拭いた後に、北部産の衣服に着換えるの

である。北部製の皿や碗で食事をとり、同じく北部製の箒で部屋を掃除する。庭の手入れは北部の鋏をするのだし、パン粉をこねる時にはヤンキー製の鋤か木の鉢を使う。パンがまを燃す木もニューヨークやコネチカット製の斧できり倒さねばならない」状態を認識し、繁栄は農業にのみ没頭するところからは生じてこないことを悟るべき時である。プランターは自らの靴を、奴隷の衣服をつくるために製造業を興し、奴隷州は団結してその権利と独立性を維持しなければならぬ。一般に「神は自ら助くる者を助け給う」と考えたパイクは、カルフーンが提起し、これまでの大会で解決にまで至らなかった論点に決着をつけた。ここには従来、隠蔽されてきた北部と連邦への強い非難が表出している。南部は経済的自立と同時に、政治的自立をも明言する「きわだったリーダー」を得たのである。^⑤

すなわちパイクによれば、太平洋鉄道建設に連邦政府は関与すべきではない。外国資本の導入や投機家の対象にもなるべきではない。ルートは大会が最短距離と認めたものをとるべきであり、つまりは関係諸州「自ら」が実現させなければならないのである。

彼は「この案が妄想的と呼ばれるなら、南部で何かやろうとすることはすべて妄想的だと言わねばならぬ」ほどに確実だと考えられる方法を提示する。曰く、南部諸州は協同して南部太平洋鉄道会社 Southern Pacific Railroad Co. にチャーターを与える。それは憲法の範囲を逸脱するものではない。必要資本の調達は株式として南部諸州、および西部ターミナルとして利益を受けるカリフォルニアが郡、市、私企業、個人に割当てるなどの方法により、各々 200 万ドルずつ引受ける。チェロキー、チョクトー、クリークなどの各インディアン部族もこの計画に参加することが望ましい。テキサスはその公有地を提供することによって十分な協力を与えたことになるであろう。メキシコ領内通過の際には、該社が通行権について交渉し、必要とあらばそれを購入する権限を与えておけばよい。^⑥

資本のおよそ半分ほどは、このように南部内で調達可能であり、残余はニューヨークで賄いえよう。経常費の捻出は該社が連邦政府と長期契約を結んで郵便輸送、軍隊および軍需物資の輸送に当ることとし、前払い制にすることで解

決されるであろう。

この「途方もない計画」は、有能で現実派の人々を驚かせた。鉄道家であり州知事でもあったテネシーのJ・A・ジョーンズ、同じく鉄道家のミシシッピのN・D・コールマン、ジョージア選出の上院議員ドーソン、同州判事ネスビットなどは、それぞれの立場からこの計画の非現実性、強いセクショナルリズムと政治臭、合衆国憲法との抵触問題について反対した。

バイクは華々しい雄弁で再反論しその自信のほどを示した結果、州単位による投票で賛成をかちとったのである。彼の案を支持した人々の大半は、連邦政府に如何なる援助も頼まないとする点や、その計画が本質的にセクショナルであるところを歓迎したとされているが、南部商業会議の一つの転機を画するものであると言えよう。

またそれは1850年妥協の直前、直後の連邦脱退運動に敗れた猪突派、ド・バウ、ヤンシー、ラフィン等が同運動の失敗に鑑みて戦術転換を行ない、より多くの考慮を経済問題に払うべきことを自覚し、ことに南部ルートによる大陸横断鉄道計画を強く推進したことにより加速された。勿論、過ぐる1854年の大陸横断鉄道建設を起因としたカンザス・ネブラスカ法、それに継起した極めてセクショナルな共和党の結成が大きな外的刺激となったことは言うまでもない。

モービル・アドヴァタイザー紙は、この大会の決議事項に反対と失望の念を表明した(1855年1月14日付)。同じく南部のニューオリンズ・コマーシャル・ブレティン紙は、軽薄なプランター、口先きのうまい法律家、懶惰な紳士たち、アマチュアの商人、刺激的な政治家の参加していることに不信の眼を向けていた(1855年1月12日付)。セントルイス・デモクラット紙は、連邦分離運動の集会であるとさえ解し、ことにバイクの鉄道案は危険視された。

ひとりド・バウのみが、なるほど参加者の中に好ましからざる人物、非現実的で役に立たぬ人物の存在することを認めつつも、その討論の中に学びの糧となるものが多く、且つ大衆のスピリットが豊かに汲みとれるとして終始変らぬ擁護者であることを示した。

北部からはニューヨーク・トリビューン紙が、何時もと同じ鋭く皮肉な言葉を掲載してきた。ニューヨーク・ヘラルド紙は、それに比し極めて上ずべりで

軽率な論評を加えた。一方、ニューヨーク・タイムズ紙は南部に同情的であった。「これら一連の大会は南部人に産業の多様化、農業の多角化等が必要であることを認識させた点で価値がある。南部諸州の利益を増すものが何であれ、それは合衆国全体の利益を増すものである。パイクの鉄道建設案は現実的なものである、ただしそれが最後に成功するかどうかは疑わしいが。ただ我々はその会議が地域偏向的態度をとっているのを残念に思う……南部は勿論、それ自身の利益のために鉄道を建設する権利がある。しかしこのことは当然、北部もその利益のために鉄道をつくらねばならぬということの意味する……我々はパイクがニューヨークで必要な資本を入手しうよう招待する。なぜなら、インディアン諸部族からよりはウォール街の方がより調達が容易であるから」。

南部はセクショナリズムへと向って一つの山をこえた。それは1854年3月、共和党の結成と、5月、カンザス・ネブラスカ法の制定をはさんだ4月、チャールストン大会でパイクの計画が飛躍したことに示される。肝心の南部人心の可成りの離反にあって、しばらくの間、谷間を歩いて低調であった南部商業会議は再び1856年12月、サヴァンナに多くの代表を迎えることになった。それとともに、同会議も最終局面の様相を帯びることになる。

11月の大統領選挙で激戦を展開した結果、「黒い共和党」に少差で辛勝したというにがい事実が刺激剤になったことは疑いえない。そのため、それ以前のどの会議よりも政治問題が広汎にとりあげられた。

会長J・ライオン(ヴァージニア)は、従来と同じくこの大会が分離運動を目的とするものではないこと、南部の欲するのは商業的自立であって政治的独立ではないと主張したが、「将来を見通して」南部がその権利を守らねばならぬ時がくるかも知れぬこと、またそのような時のために南部が強くしっかりとしたものになっておくのは当然である、と附言しているのは真に注目すべきことである。

⑤ テネシー州ナッシュビル市議会は、この大会が分離主義の傾向を持つとして代表を指名することを拒否したが、ライオン演説と合してこの大会を分離運動と断ずることは早計にすぎよう。ただし会長ライオンの言うごとく、「民主党が政権を握っている」ことが救いであるとの認識が確かにあった。また一史

家には、地域間「戦争が鎮まったのではなく、1860年に決着をつけるべく延引されたにすぎない」と映じる光景でもあった。従ってライオン発言には、政治的対決の迫っていることを警告した側面があると解釈されている。看過すべからざる指摘である。

これらの空気は次の諸紙に垣間見られる。ユニオン派のサヴァンナ・リパブリカン紙は、大会前の11月17日、分離感情は認められないと観測し、後に大部分は保守派の人々で構成されているが可成りの分離主義者が参加している、と訂正している(12月16日)^⑮。同紙の微妙な論調の変化が、この大会の性格を言いあてている。

今まで親南部的であったニューヨーク・タイムズ紙は、会議の進行に伴い入手した議事内容に従って真に千差な論評を加えた。12月13日、「今までの大会は善をなしてきた。見当違いの計画をたてる男たちに、それを吐露する場を与えてやることによって安全弁の役目を果たしてきた……南部の嵐は吹きあれ、そして吹き消された……分離主義者は頭を垂れ、ユニオンは今少し長らえることができよう」。12月15日、「北部の出版物、人物、世論、企業を非難することに激しい怒りを感じ、無智無能の愚行なりと考えないではいられない」^⑯。

南部大衆に明らかにされた討議内容は次のごときものであった。(一)内部開発、(二)国内および対外通商、(三)鉱山、工場および諸技術、(四)農業とその振興策、(五)社会制度および南部の諸制度。

どちらかと言えば従来の大会で論ぜられた主題は軽視される空気が強かった。最後の議題ははじめて登場したものであり、極めて屈曲性に富み、且つ包括的なタイトルを附されていたため、不信と詮索の眼がこれに集中した。ジョージア州のW・B・グールデンのこの提唱が圧倒的多数で否決されたこと、一般の空気が保守的であったこと、ユニオン脱退の試みについては発言されもしなかったことに南部の各紙は大いに満足の意を表した。しかしすでに観察したごとく、表面保守的な議論や穏当な決議の底に、何時の日か爆発すべき過激な思想が潜んでいるのを看過しえない。否決されはしたが、議場ではじめて奴隷交易を禁止した法の撤廃を求めた決議が出されたのが、この1856年大会だったのである。

1857年テネシー州ノックスヴィル大会でも、ユニオンに対し如何なるよこしまな心を持たず、ただ南部の資源開発と社会制度を狂信者から防禦するのが本意であると公表されたが、前年の大会を取材した北部の非友好的な特派員の取材活動の排除を提案したメイソン(アラバマ)たちの態度の硬さが、この大会の性格を印象づけている。

従前の諸大会における議題が全く見失われたわけではないが、その目的は地域的政策によって南部を統合することであり、「その他の諸目的は、この大会の高遠な道徳および社会目的に比すれば些細な重要性しか持たない」。「その目的はさらに遠く高くひろげられ、我々の繁栄を損なうことなく、それを保持すべき最も聖なる絆によって我々を結びつける」ことがより重大であるとされた。

すでに分離論者である旨を公言していた会長ド・パウは、開会に当って「商業会議は鉄道を敷設しなかったし、ヨーロッパへの直通定期便を開設することもできなかった。しかし南部人にそれらの事柄の重要性を認識させた。南部がユニオン自体よりも幾千倍もの価値ある諸権利を持っているのだということを教えた。南部がユニオン内において重要であることを示すに足る十分な資源を有するが、それに非ざれば独立した国家として自らを維持しうるのでということ人を人々に知らしめた」と熱弁をふるっている。ここに至っては贅言を費やして性格を分析する必要はないであろう。

長時間に亘って審議されたのは、奴隷交易再開についてであったが、66対26の投票で1842年11月10日に批准されたウェブスター・アシュバートン条約（アフリカ沿岸に軍艦を派して奴隷密貿易を看視する）廃棄の決議が通過し、テネシー州代表の「それは合衆国政府の既定の政策に反し、不得策な決議である」と修正を求めたに対しては、賛成40反対50と奴隷貿易への執心のほどを示した。或るヴァージニア人はもう大会が開られない方がよいと思い、テネシー州の歓迎をうけ無賃乗車の特典を与えられた「南部のユートピア的臆説家たち」の馬鹿さ加減に愛想をつかし、踊りはしゃぎ夜明けまで шамペンが水のごとくに流れた閉会式のみが白眉であったにすぎぬ不評の大会は幕を閉じたのである。南部商業会議は、どうやら商業から政治的商業へと次元を移し終ったらしく思われる。

（註）

- ① Wender, *op. cit.*, pp. 163-164.
- ② Peterson, *op. cit.*, p. 209.
- ③ Wender, *op. cit.*, p. 150.
- ④ *Ibid.*, p. 151.
- ⑤ Peterson, *op. cit.*, p. 209.
- ⑥ Wender, *op. cit.*, p. 149.
- ⑦ *Ibid.*, p. 150.
- ⑧ Russel, *op. cit.*, p. 135 ; Peterson, *op. cit.*, p. 209.
- ⑨ Cole, *Irrepressible Conflict*, p. 71 ; Russel, *op. cit.*, pp. 123ff.; J.W. DuBose, *Life and Times of William Lowndes Yancey* (1892) ; pp. 385ff.; Peterson, *op. cit.*, p. 209 ; Cole, "South and Right of Secession," pp. 376-399.
- ⑩ 拙稿「カンザス・ネブラスカ法案」参照。
- ⑪ Peterson, *op. cit.*, p. 211.
- ⑫ Wender, *op. cit.*, p. 145.
- ⑬ *Ibid.*, pp. 145-146.
- ⑭ Peterson, *op. cit.*, p. 210.
- ⑮ *Ibid.*
- ⑯ *Ibid.*
- ⑰ Russel, *op. cit.*, pp. 138-139.
- ⑱ Wender, *op. cit.*, p. 173, 185.
- ⑲ Peterson, *op. cit.*, p. 211.
- ⑳ Wender, *op. cit.*, pp. 186, 203. その要求は通らなかったが、それとともに拒否すべきか否かをめぐって、まる2日間も討議されたという事実は、これら会議の非現実的、非実際の傾向を示す一例としても、同大会の変質を表した例としても記憶されてよい。
- ㉑ Peterson, *op. cit.*, p. 211.
- ㉒ Wender, *op. cit.*, pp. 205-206.

（六） 終 局

初期の諸大会は疑いもなく、その名の示す通りの商業会議であった。地方政治家も多数参加してはいたがその目的とするは、ただ南部の経済刷新にあった。

やがて政治的独立を達成するための予備段階として経済的独立が必要と考えられるようになったが(1854年～56年)、ここまでくればさらに「経済的独立は政治的独立のないところに達成されえない」^①、との決心に至るのはむしろ当然と言えるかも知れない。

初期の大会には勿論、大部分地方政治家が代表として参加していたが、公人も加わっていた。プランターや言論人、牧師、医師、教授、実業家、銀行家、商人たちが多数出席していた。製造業者や鉄道、汽船などの運輸関係者の存在も認めることができた。なぜなら彼らはこの大会で保証をとりつきたいと願っていたからである。

しかし彼らは1857年のノックスヴィル大会までに参加しなくなっていた。華やかな演説とおびただしい数の決議にもかかわらず、大会が実現させたものはほとんどなかった。幾つかの小委員会を設置し有能な委員長を擁しておりながら、その課された仕事に真剣に取り組もうとしない態度や、決議事項を立法化する力を持たない(州或いは連邦政府に推奨、もしくは陳情するにとどまる)大会からは、何ら利益となるものが生まれてこないと現実派の商人や実業家が信じて脱落していったのは当然かも知れない。

ノックスヴィル大会以来、退潮的であった保守分子もまた姿を消していった。大会の目的が捻じまげられ構成人物が変化したことについては、南部内外での地域間闘争が激化したこと、分離主義者の攻勢が激しさを加えたことが主因であり、それ以外に若干の理由が附加しうがそれらはマイナーな要因といってよい。

南部商業会議の最後の絶望的な努力は、アフリカ奴隷貿易再開運動に捧げられた。今までとりあげられてきた議題——鉄道建設計画はおろか、南部的出版物、南部的教育問題でさえ顧みられることがなかった。

南部の主人公プランターにも、かつては注文がつけられた。たとえばプランターは、国土を開発し人口を増加させるために鉄道建設に積極的に参画すべきである。そうすれば自らの地価をあげることも可能であるし、西部をも手中にすることができる。或いは彼らは製造業をおこすべきである、そうすれば資本は南部に流入するであろう。或いは彼らは棉花の直接輸出をはかるべきである、

それによってあらゆる種類の間接搾取が排除されるであろう。プランターは黒人奴隷を製造業に使うべきである、そうすれば南部製造業の振興が可能となる他に棉花生産に集中されてそのみに使用されている資本を分散多角化する方向に沿い、そのゆえに棉花の生産量を減らし、その結果棉花の騰貴が得られるのである。それは同時に、毎年^④の連作と粗放的な農法によって涸渇しつつある土地を休耕させ、地力を回復させるにも有効であるはずだから……等々。

しかし1850年から60年までの10年間は、南部はかつてないほどに活況を呈していた。棉価は40年代に比し2倍にも高騰していた。そのことが経済組織、農耕法の改変を拒否させた。もし棉花やタバコが惨めなほどの価格しか与えられていなかったら、プランターたちも改革者や“regional planner”の説に耳を傾けたかも知れない。

④ プランターは例の悪循環をくり返しはじめた——より多くの棉花を生産するためにより多くの奴隷を買う、そしてより多くの奴隷を買うためにより多くの棉花をつくらねばならぬ、と。需要と供給の原則がすぐさま作用して、1850年には1,000ドルであった一人前の野良男は、1859年には1,600乃至1,700ドルであり、時としては2,000ドルをこすことさえあった。1858年末アラバマ州オーガスタヴィルでは150人の、年齢も条件も異なったニグロが平均して1人950ドルで取引された。

このような高値と、ニューヨークやニューイングランドの諸港からヤンキー船が不法に奴隷売買のために出航していることに気がついた時、また奴隷制の基盤が拡大されるならば「南部人のあらゆる人々がこの制度に直接的な関心」を持つことができるし（ド・バウ）、「プア・ホワイトに我々の社会制度の利点を享受させる」ことにもなり、「彼らが今のところはただ愛国心でのみ愛している南部に、より明白な利害と関心を与える」（E・A・ポラード）。

⑤ ヨーマン層の忠誠心を如何にすればつなぎとめておけるかということこそ当時の南部におけるすべての運動の成否の鍵であった以上、大会の討議事項のトップに奴隷交易再開問題がとりあげられたとしても不思議ではない。かくて1858年モントゴメリー大会は、奴隷交易特別委員会のレポートのみを扱うに至ったのである。

⑥

ほとんど全期間がそれに費やされた。このようにして最早や商業会議ではなく「分離派の集会」に変化してしまっている大会では、「アフリカ奴隷交易再開は得策であるかどうか」というとりあげられ方だけでなく、それを禁じている連邦法は正しいかどうか」といった政治的な扱い方をうけて、代表たちの間に激論と分裂をよびこむことになったのである。たとえばド・パウは言う、分離非難の声に怯む必要はない、かえって北部人に対しあらゆる種類の悪漢を指す語をすべて投げかけても足りぬほどである。彼らは「違憲の法を破廉恥にも是としているからである」。このような激越な発言の背景に、前年のドレッド・スコット判決が南部見解の正しさを確認していたことが存在していた。

サウスカロライナのL・W・スプラットも次のような主張を展開した。すなわち南部で最も不足しているものの一つは人口である。それは政治力に必要であり、政治力は自由確保のために必要である。多数者が支配するのであり北部が多数派なのである。アフリカ奴隷交易は我々に政治力を与えてくれる、なぜなら合衆国憲法第一条第二節の五分の三ルールのためにより、奴隷5人は白人3人として数えられて下院議員の数に反映するからである。しかし政治力を確保するには州を獲得する必要がある（上院議員）。然して今までの経験に徴し、奴隷なしで奴隷准州をつくるなどは不可能なことである。奴隷の輸入——それこそは人口を増加させ、未開拓のままに放置されている広大な土地の耕作を可能にする。南部は豊かな労働力を得る。棉価は他の農産物と同じレベルにまで下落するかも知れないが、それ以下に下がりすぎることはあるまい。南部は危険な単一栽植に依存しないようになるであろう。より貧しき人々も奴隷を持ちうる可能性が与えられ、奴隷所有者と非奴隷所有者との間の溝は取り払われることになるであろう。これはこの大会で他の何物にもまして排他的にとりあげられ、特段に活発であった奴隷交易特別委員会での発言であった。

すでに奴隷養殖州として知られているヴァージニアのプライアは最初はその説に賛成であったが、熟考してみるとそれは真に愚かな主張であると思うようになった。彼は言う、もし南部が北部の政策をやぶるためにより多くの人口を必要とするなら、ニグロをでなく白人労働力を輸入すべきである。奴隷が最も貧しい人々の間にまで所有されるようになればその価格は当然下落をきたすこと

になり、奴隷価格の下落は結局奴隷主の半分もしくは三分の一をして奴隷制廃止に向わせるかも知れない。さらにアフリカ奴隷交易再開の真意はユニオン解体の野心に発すると考えられる、なぜなら再開はユニオンが存続する限り不可能であるからだ。従ってかかる提案は「純正且つ簡明にユニオン解体の提唱である。なぜならユニオンが続く間は、実現されえないからである」^⑫。

それに応じて議場を支配するに至っていたアラバマのヤンシーは、奴隷交易禁止法の合憲性に疑問を持っていると発言した。確かにこの法が通過した時（1821年）、それが南部に害をおよぼすとは考えられなかった。従って憲法の精神に反するとも思われなかった。しかし条件はひどく違ってきた。ミズーリ協定は30年以上も前には合憲であると考えられ、そのゆえにカルフーンやモンローが認めたのである。然るに1857年に合衆国最高裁がドレッド・スコット判決において、それを違憲としている。まさに事態は激変しているのである。

さらに貿易を禁ずるとするのは貿易を統制するのとは意味が異なる。また一歩ゆずってもし国会にそうする権力があるとして、外国との奴隷交易を禁止できるのなら、なぜ現在南部で行なわれている州際奴隷交易を止めえないのか。これらの法律は実際、憲法の「条文」に違反していないとしても、その「精神」には違背していることが明白である、と。^⑬

「もし奴隷が僅か5ドルしか値打がないようになった時、諸君は奴隷制擁護のために、或いは南部の平和と幸福のために銃をとって戦うであろうか。我々の制度を永続させるには奴隷価格を常に高く保っておく以外にはないのである」^⑭とは全く倒錯的な言葉であるが、それはヴァージニアの立場、或いは自然増によって奴隷の増加と高値を期待しうる既成の上流プランターの立場^⑮を代表するものと考えられる。

奴隷交易再開は多分、ヴァージニアをして南部側につかしめている最後の絆を危うくするものであった。「アフリカ奴隷交易再開について論ずるは無用無益のことである。なぜならそれはユニオン内では復活することのできないものであるから。また南部がそのゆえに分離するなどは愚かなことである、なぜなら南部はそのようなことについては団結しないから。分離——その時にはヴァージニアは北部連邦の中の南部である方が^⑯いいか、南部連合の中の北部である方が

得策なのかを考えた方がよい……」。

⑮
ボルチモア・アメリカン紙(1858年5月20日)は、「かつては楽しかった大会も今やナンセンスであり軽蔑すべきでさえある。もうこれ以上の大会は必要ではない」と突っぱねた。「代表たちのほとんどは名声欲にかられた政治家、訴訟依頼人のない弁護士、患者の寄りつかない医者、購読者を探している新聞屋、多趣味なひま人」ばかりで、真の南部を代表していない「無宿者の一隊」である。「今や大会およびそのすべての仕事は一般の人々に嫌悪をもって迎えられようになった」。

⑯
南部でのユニオン派、冷静な分離派の双方から非難され、北部から嘲笑されて、最後のヴィクスバーグ大会は再び召集をかけない旨の宣言をした。それを押して参集した人々は、奴隷交易復活と、それへの反対には武力の行使を主張した。南部商業会議はどちらかといえば光栄ならざる終末を迎えたのである。

⑰
初期の南部商業会議は少なくとも健康な一側面を有していた。真剣な態度で南部諸州の物質的、政治的利益を改善発展させようと努めた、たとえその計画と前提が誤っていたにせよ。

南部は指導性を失いつつあり、北部は力を増しつつあった——この相違の底流をなすものは経済であった。自由州は富裕に、奴隷州は比較的スタチックであったゆえである。

南部人は昔日の栄光をとりもどし、また独特の制度を維持せんものと大会に参集した。しかし彼らはその目的を達することができなかった。なぜなら彼らは神聖不可侵の奴隷制や、棉花という専制者について疑問を持つとはしなかったからである。経済復興や多角化へと向かず、奴隷制領域拡大を指向した時、泡と消えてしまったのである。

しかしこの運動は何物をももたらさなかったというのではない。約言すれば、南部人一般に南部の状態と条件についての認識を深めさせ研究する気運を作興した一方、分離および武力闘争へと至る感情の醸成に大きく貢献したのである。大会は疑いもなく分離感情をひろめるのに大きくかわりあった。共通の感情と共通の喜怒哀楽を感じるオリンピアードのヘレヌスのごとく、共通の大会で「南部人」であることを痛感したにしろ(ド・パウ)、或いは内戦前の“regional

planner” と解するにしろ(C・イートン)、双方ともに南部のセクショナリズム形成に作用した事実を看過していない。

南部商業会議は合衆国の西部膨張がもたらした諸変化に対応しながら、奴隷制を不可侵の制度として捉えることにより、当初の目的とした経済的自立から離れて最終局面においては分離主義者が優勢を占める場を提供し、セクショナリズム強化の一機関となり共存の競争から過激な闘争への序章を提供することになったのである。

(註)

- ① Wender, *op. cit.*, pp. 207-208.
- ② Russel, *op. cit.*, p. 147.
- ③ 代表の選出法、会議の進行法、会議の権限、政党との関係等。
- ④ Eaton, *op. cit.*, p. 442.
- ⑤ “African Labor Supply Association,” cited in Peterson, *op. cit.*, p. 213; Theodore C. Smith, *Parties and Slavery 1850—1859* (1968), p. 296.
- ⑥ Peterson, *op. cit.*, p. 212.
- ⑦ Russel, *op. cit.*, p. 143.
- ⑧ Peterson, *op. cit.*, p. 211.
- ⑨ 前掲拙稿「ドレッド・スコット判決」参照。
- ⑩ Wender, *op. cit.*, pp. 212-213; Peterson, *op. cit.*, p. 212.
- ⑪ *Ibid.*
- ⑫ *Ibid.*; Wender, *op. cit.*, pp. 214-216.
- ⑬ *Ibid.*, p. 224; Peterson, *op. cit.*, pp. 212-213.
- ⑭ Wender, *op. cit.*, p. 232.
- ⑮ Cole, *Irrepressible Conflict*, p. 77.
- ⑯ Wender, *op. cit.*, pp. 224, 225, 226.
- ⑰ *Ibid.*, p. 226; Cole, *Irrepressible Conflict*, p. 77.
- ⑱ Wender, *op. cit.*, p. 226.
- ⑲ *Ibid.*, p. 227.
- ⑳ Peterson, *op. cit.*, p. 213.